男性高齢者の地域活動
―W 団体の調査研究に依拠して―

同志社大学社会学部社会福祉学科
1109102026
開道菜月

指導教員　鈴木良

＜梗概＞

超高齢社会となった日本では今も高齢化率は上昇し続け、一人暮らしの高齢者の数も増加を続けている。中でも男性高齢者は、退職後の喪失感、家族や友人との交流、趣味などを通した社会活動への参加機会等の乏しさから、生活意欲の低下が女性高齢者よりも進んでいると言われている。そこで本研究では、男性高齢者のみで活動を行う W 団体の調査研究に依拠し、「男性高齢者の居場所づくり」の実態と課題を明らかにすることを目的とした。

本研究は、先行研究と W 団体への調査結果を比較しながら、1)活動参加の経緯、2)活動参加による成果、3)活動継続の推進要因を明らかにした。その結果、活動参加を通して地域のつながりの中で生きていると感じられたりと、個々の QOL の向上につながっていることが明らかになった。そして、活動を継続し、高齢男性の居場所づくりを進めていくためには、幅広い活動の展開、メンバーに対する活動の負担の少なさが求められることが分かった。

目次

序章　研究の背景と目的・方法

１．高齢者の現状　1

２．男性高齢者の居場所づくり　1-2

３．調査研究の概要　3

第一章　先行研究

１．活動参加の経緯について　3-5

２．活動参加による成果について　5-7

３．活動継続の推進要因について　7-8

４．まとめ　8-9

第二章　調査研究

１．活動の経緯

１.１．社会背景　9-10

１.２．W 団体について　10

２．活動の効果

２.１．地域交流　11

２.２．個々人の生活の向上　11

３．　活動の課題と解決策
　　３.１．　課題　11-12
　　３.２．　解決策　12-14
　　３.３．　コロナ禍の活動　14
４．　まとめ　14-15

終章　結論
　　１．　活動参加の経緯　15-16
　　２．　活動参加による成果　16
　　３．　活動継続の推進要因　17
　　４．　課題　17

引用文献

謝辞

序章　研究の背景と目的・方法

１．高齢者の現状

内閣府によると我が国の総人口は、令和 2 年 10 月 1 日時点で 1 億 2,571 万人である。65 歳以上人口は 3,619 万人、総人口に占める割合（高齢化率）は 28.8%となり、世界で最も高い高齢化率となっている。65 歳以上の人口を男女別に見ると、男性は 1,574 万人、女性は 2,045 万人で、性比（女性人口　100 人に対する男性人口）は 77.0 であり、男性対女性の比は約 3 対 4 となっている。今後も 65 歳以上の人口は増加が続き、高齢化率は令和 18 年に 33.3%で 3 人に 1 人が 65 歳以上の者となると推計されている。

次に、65 歳以上の者のいる世帯について注目していく。令和元年時点で、世帯数は 2,558 万 4 千世帯と、全世帯（5,178 万 5 千世帯）の 49.4%を占めている。世帯構造としては、昭和 55 年では三世代世帯の割合が一番多く、全体の半数を占めていた。しかし、令和元年では夫婦のみの世帯が一番多く約 3 割を占めており、次いで単独世帯と続き、この二種類の世帯合計は全体の約 6 割となっている。このように、現在問題視されている 65 歳以上の一人暮らしの者は男女ともに増加傾向にあることがうかがえる。実際、昭和 55 年には男性約 19 万人、女性約 69 万人、65 歳以上人口に占める割合は男性 4.3%、女性 11.2%であったが、平成 27 年には男性約 192 万人、女性約 400 万人、65 歳以上人口に占める割合は男性 13.3%、女性 21.1%と大幅な増加に至っている。

２．男性高齢者の居場所づくり

このように、高齢化率は上昇し続け、さらに一人暮らしの高齢者の数も増加を続けている。その中でも特に男性高齢者は、退職後の喪失感、家族や友人との交流、趣味などを通した社会活動への参加機会等の乏しさから、生活意欲の低下が女性高齢者よりも進んでいると言われている。このような実態に対して、全国では地域活動が行われている。筆者がインターネットで調べたところ、京都市では表１のように以下の５つの男性高齢者を対象とした活動があることが分かった[1]。

例えば、下京区男塾は京都市下京区で定年退職後の男性が地域で活躍できる場づくりをと、京都市下京区社会福祉協議会が４年前に開講した地域支え合い活動入門講座「下京男塾」を受講した人達で活動を開始した。活動内容は、同区のひと・まち交流館京都などの施設で開かれる福祉関係の集いに、メンバーがコーヒー豆や電気ポット、ハンドドリップの器具を持ち込んで、おいしいコーヒーを提供している。高齢者や障害者施設を訪ねて、マジック披露や卓上のゲーム・遊びなどで利用者と交流したりするほか、自分たちでもできる簡単な調理を学ぶ講習会を開いたり、ウクレレ演奏を学んだり、囲碁・将棋を一緒に楽しんだりと幅広く活動を行っている。

活動名	活動場所	活動の経緯	活動内容
下京男塾	京都市下京区	定年退職後の男性が地域で活躍できる場づくりをと、京都市下京区社会福祉協議会が４年前に開講した地域支え合い活動入門講座「下京男塾」を受講した人達で活動	同区のひと・まち交流館京都などの施設で開かれる福祉関係の集いに、メンバーがコーヒー豆や電気ポット、ハンドドリップの器具を持ち込んで、いれ方の腕を磨いたおいしいコーヒーを提供。高齢者や障害者施設を訪ねて、マジック披露や卓上のゲーム・遊びなどで利用者と交流したりするほか、自身らでもできる簡単な調理を学ぶ講習会を開いたり、ウクレレ演奏を学んだり、囲碁・将棋を一緒に楽しんだりと活動は幅広い
男の体操同好会	京都市北区		健康保持と老化防止のための健康づくり、ひいては介護予防を目的に講師の指導により筋力トレーニング・ストレッチを行っている
男性運動同好会	京都市左京区		体操を中心とした運動で、健康と体力の維持・向上を図る。同じ趣味を持つ方が集まり、教えたり教えられたり和気あいあいとした活動となっている。当同好会は登録制で世話人を中心に自主的に活動
男の料理教室	京都市下京区	菊浜学区社会福祉協議会が主催する愛称「せせらぎサロン」に男性参加者が増えるようにと企画され始まった	栄養バランスの取れた食事をとることや手順を考えながら手先を動かし調理することも介護予防になり、男性の皆さんが関心をもって参加している。下京区地域介護予防推進センターの栄養士さんの指導のもとメンバー一丸となって料理を作る。普段は体操や気軽に足を運んでもらいやすいモーニングを実施
右京気ままおやじ会	京都市上京区	きっかけは京都市の地域支え合い活動創出事業の一環で行われた中高年男性対象のボランティア講座で、参加者同士仲よくなり、「このまま解散するのは惜しい」「何か一緒にやってみよう」ということで、同会を2019年4月に結成。右京区社会福祉協議会や京都市梅津地域包括支援センターなどの協力も得つつ、活動を行ってきた	対象は65歳以上の男性。メンバーは15～16人いて、最高齢は85歳。ボランティアで高齢者施設でコーヒーをふるまったり、区のイベントの案内スタッフをしたりしている。また、車いすの押し方研修や無農薬野菜講座なども、講師を招いて自主開催している。ウォーキングの会や外部のイベントにも誘い合って参加。月に一度活動場所に向かう前に、地元の公園を清掃している。活動内容はいつも自分たちで相談し合って決定する

表１　京都市の男性高齢者を対象とした居場所の活動の経緯と内容

このように、京都市内でもいくつかの男性高齢者を対象とした地域活動は行われている。しかし、先行研究にあるような、地域活動を通した参加者への影響や意欲の向上については詳しく明らかにされていない。

そこでこの研究では、地域の人との関係や生きがいを作り出すといった、心身ともに良い影響を与えられる地域活動に焦点を置き、京都市の「男性高齢者の居場所づくり」の実態と課題を明らかにすることを研究目的とする。

３． 調査研究の概要

私が男性のみの地域活動に興味を持った際、先生を通して京都市 A 区で行われている W 団体の存在を知った。そこで京都市 A 区社会福祉協議会に連絡を取り、当団体のメンバーに話を伺うため、活動に参加させてもらうことになった。

そして 2022 年 8 月 4 日、活動に参加していた 4 人のメンバーに対してフォーカス・グループ・インタビューを行い、社会福祉協議会の職員との話し合いの場にも参加した。インタビュー時間は約一時間半ほどであった。インタビューの質問は、活動に焦点を置き、活動参加に至った経緯やそれらが参加者に与える影響、活動に対するメンバーの考えなどを伺った。

第一章　先行研究

本章では、男性高齢者の居場所に関する研究を検討してみよう。以下では、先行研究を 1)活動参加の経緯についての研究、2)活動参加による成果についての研究、3)活動継続の推進要因についての研究に分類した。

１． 活動参加の経緯について

第一に、活動参加の経緯についての研究は以下のとおりである。

矢野ら(2008)は、2006 年 7 月 27 日～29 日に、中国山地の脊梁に位置する自然豊かな C 町（人口 4,983 人）で暮らす 60～80 歳代の男性で、地域活動に参加している 16 人の A 群と、参加していない 8 人の B 群、合計 24 人を対象として面接調査を行った。A 群では 70 歳代が 12 人で全体のおよそ 75%を占めていた。B 群では比較的若い年齢である 60 歳代の人が 3 人（38%）いた。両群ともにアンケート用紙を用いて個人面接を行った。調査内容は身体的状況、心理的状況、社会的状況、地域活動に対する意識等で構成されている。

この調査から主に以下の 3 つを考察している。まず、社会参加する要因として、外出時の ADL の自立と周りからの誘いの有無が関係するかどうかの点である。B 群の全員が地域で活動が行われていることは知っていたが、参加しない理由として、「身体の不調」が 5 人（62.5%）と多かった。B 群の疾患や自覚症状では、「身体の痛みがある」「忘れやすい」「聞こえにくい」「白内障」「ヘルニア」が多く、これらは日常生活に支障をきたすと思われる

ものであり、それが社会参加に対して消極的要因ではないかと矢野らは考えている。A 群の地域活動に参加し続ける理由として、全員が「健康のため」「体調が良くなるから」と答えていたことからも、健康の維持・増進のために地域活動に参加していると考えた。また、A 群の地域活動への参加のきっかけは、「友人に誘われた」が 10 人（62.5%）と最も多かった。中には、「聴力が衰えたため、地域活動に参加することを一時やめていたが、友人に誘われたので再び参加するようになった」と答えた人もおり、矢野らは人からの誘いが参加のきっかけにつながっている現状を明らかにした。

次に、両群とも、内容は異なるが趣味や楽しみがあり、楽しい・居心地が良いと感じる場所が、家の内外であるということが社会参加と関係するかどうかという点である。A 群の趣味の内容は、他社との交流や、個人で出来るものなど多彩であった。一方、B 群では、「テレビ」「パチンコ」「植木」等個人で行えるものばかりであった。A 群は家の外や他者の中にも自分の居場所があり、居心地の良さを感じている一方で、B 群では他者との交流は少なく、家の中や家族に居心地の良さを感じていることを見出し、この違いが社会参加と関係していると考察している。

さらに、退職前の職業によっても、外出や人付き合いの得意・不得意が関与している傾向があるかどうかという点である。過去の職業は A 群では「土木建築」が 7 人（43.7%）、次いで「製造業」「卸問屋」「農業」がそれぞれ 2 人（12.5%）、「公務員」「会社員」「自営業」がそれぞれ 1 人であった。一方 B 群では、「自営業」が 3 人（37.5%）、「公務員」が 2 人（25%）、その他「農業」「金融機関」「土木建築」が 1 人であった。A 群の多くは仕事上以前から人と関わることが日常的であり、人と関わることに慣れ親しんでいると考えられ、社会参加に抵抗を感じにくいと推測している。B 群の多くを占める公務員や金融機関に勤務していた人の面接時の印象として、インテリ層らしい風格、自尊心が高い様子が見受けられたことからも、いろいろな人が多く集まる地域などの社会参加に抵抗を持っているように矢野らは感じた。また、同様に多かった自営業も家で一人で作業することが多いことから、退職後も家を出て社会参加することに消極的な傾向にあるのではないかと矢野らは考えている。

木村(2008)は、東京都多摩市の北東部に位置する戸建て住宅団地である桜ケ丘団地を調査対象地域とし、第一に男性退職者によるコミュニティ活動への参加状況と活動形態を把握するアンケート調査を行い、第二に男性退職者が活動している組織の設立経緯や活動内容とともに、彼らがこれらの活動に参加する契機などに関する聞き取り調査を行った。

第一のアンケート調査では、桜ケ丘団地の男性居住者を対象にアンケート調査を行い、総回答数１８６世のうち、有効回答数は１６１世帯であった。コミュニティ活動への参加者は、在職者は非参加者が大きく上回るのに対して、退職者では参加者と非参加者がほぼ同数である。年齢別では、在職者であっても 60～70 歳代にかけては参加者の割合が 4 割強に達する。このことは、定年退職を機に時間的な余裕が生じ、コミュニティ活動に参加するようになったことが示唆されている。活動場所に関しては、在職者が「多摩市外」での活動者が多い一方で、退職者は「多摩市」 での活動者が多くなっており、活動参加者にとって活動場所の近さが活動の頻度に影響を及ぼすことが示されている。

第二の聞き取り調査は、地元で最も頻繁にコミュニティ活動を行う６名の退職者を対象に行われている。その結果、男性退職者のコミュニティ活動では、「自己の生活の充実」を目的とした活動への参加が、またこれに至る過程では妻など仲介者に依存する側面が大きいことが明らかにされている。しかし活動に参加する退職者の中には、「コミュニティの充実を図る」という目的で活動を行う一面も述べられている。木村はこれらの結果に基づき、彼らは、勤め人として培ってきた知識や経験を活かすかたちで新たに郊外コミュニティへの参加を可能にしていると主張している。

２． 活動参加による成果について

鈴木と麻原（2021）は、政令指定都市に隣接する A 市で、地区活動事業から発足した自主グループに参加する高齢男性を対象に半構造化インタビューを行った。これら男性高齢者は、定年または再雇用制度の利用後に退職した 60 歳代後半から 70 歳代前半の男性 6 名である。この研究の目的は、地域づくりを目的とした自主グループ参加による参加者の自身の生活や考え方の変化を明らかにし，これらの人々の自主グループ参加を促進する支援方法を検討することであった。

この研究の結果、男性は自主グループへの参加を通して、「グループ活動や関連事項に自発的に取り組むようになった」、「グループの仲間と活動することで退職後の生活を前向きに考えられるようになった」、「グループの成長のために仲間と互いに自主性を生かして活動するようになった」、「地域のつながりの中で生きていると気づいた」、「地域の役に立つためにグループの一員として活動するようになった」という大きく 5 つの変化があったと鈴木と麻原は明らかにしている。これらの結果から、活動する目的が自身の欲求を満たすことだけではなく、グループの仲間や地域の人々の役に立つことに変化したと鈴木らは考

える。そしてその理由としては、自主グループが誰かに活動を強制されることのないような自由な活動形態であり、地域づくりという目的のために、仲間とともに自主性を生かしながら気軽に意見交換ができ、男性を受け入れてくれる環境であったことが考えられると鈴木らは主張する。また、仲間や目標を得たことで、自らの欲求を満たすことができる活躍の場を獲得したと考えている。さらに、グループの仲間や地域の人々と協力したり感謝される体験を繰り返すことで、グループの仲間や地域に暮らす人々のために活動することにやりがいを感じ、活動をさらに広げていくようになったということを明らかにした。

百瀬、麻原、大久保(2001)は、開設後 3 年以上経過している福祉ひろばに参加している 60 歳以上の男女 424 名を対象に、自記式質問紙調査を行った。参加者へのインタビューに加えて、参加者の福祉ひろばでの経験や感想をつづった「福祉ひろばふれあいレポート」等の記録の内容分析を行うことで、福祉ひろばに参加したことによる効果を明らかにしている。

この研究の結果、最も回答数が高かったのは「楽しみが増えた」であり、次いで「人との会話が増えた」、「友だちが増えた」、「外出する機会が増えた」の順であった。そして、福祉ひろばの活動を通して得られた効果として因子分析の結果、『自己認識の変容』、『社会関係の拡大』、『健康の増進』の 3 次元の因子により構成されていることを百瀬らは示している。『自己認識の変容』は、具体的には、参加する前の自分と比べ、1 人 1 人を認め合えるようになった、家族や他の人に対して優しくなったなど、他者との関係の中で自身を客観視することで、新たな自分を発見するといった変容が生じたと主張している。それのみにとどまらず、生きがいができ、自己肯定感の高まりや、他者のために活動したいというポジティブな意識の変容もしくは動機づけにもつながったと百瀬らは考えている。

『社会関係の拡大』は、友人や外出の機会が増し、人との会話、地区の人とのつながりができたと回答する割合が高かったことから、家の中から地域へ出るきっかけとなり、そして社会関係が広がったと示している。この社会関係の拡大には、福祉ひろばが小地域単位に設置されているという特徴から、相手の顔がわかること、同一地区に住む親密性、住民同士の平等な関係性が重要な役割を果たしていると百瀬らは推測している。

『健康の増進』は、体の具合が良くなった、明るくなったという項目の回答率が高かったことから、参加をきっかけに個人の健康が増進される効果があったということを明らかにしている。

これらの研究結果から、福祉ひろばが、高齢者のエンパワメントの場として機能してい

る可能性があると百瀬らは考える。そもそも、高齢者の健康増進のためのプログラムの目的は、介護予防というよりもむしろ高齢者へのエンパワメントが重要であり、その結果としてウェルビーイングが高まり、介護予防にもつながるのではないかと百瀬らは主張している。

３． 活動継続の推進要因について

滝澤、若林(2013)は、**人口 84,942 人、65 歳以上人口割合 20.2%(2007 年 10 月）の A 市で定年退職の前後数年間にある 55～65 歳の男性を対象に、**退職男性の地域活動グループを育成し、その活動経過からグループ活動の推進要因について検討した。具体的には、活動を通じて地域とのつながりを充実させていくことができるグループづくりを目指して A 市は講座を企画し、2007 年、2008 年に実施した。講座終了後、「このまま別れるのはもったいない」といった参加者の声があったため、各年度ごとのグループ結成に至った。そのグループに継続して参加した者は，2007 年が 23 名の申込み中 10 名，2008 年が 12 名の申込み中 12 名、計 31 名だった。これらの活動場面への参加観察と、グループメンバーへの聞き取りによりグループ活動の経過を把握し、活動展開をまとめた。そしてその活動の発展過程から、 グループ活動の推進要因を抽出した。

この調査の結果、滝澤、若林は参加者側の活動の推進要因として、「肩書きにこだわらず互いをよく知ること」「自分たちにできることへの挑戦とその成果の実感」「縛られない自由と楽しさ」の 3 点を見出した。活動方法に関する要因としては、「さまざまな団体との交流や協働」「活動拠点があること」の 2 点を述べている。

小野寺・齋藤(2008)は、政令指定都市に隣接する A 町での介護予防事業およびそこから発展した自主グループ活動に継続して参加している男性参加者４人(平均年齢 70.5 歳)にインフォーマルインタビューを行った。インタビューの内容は、自主グループ活動に継続して参加できる理由についてである。

継続して参加できる理由については大きく、「事業参加による課題の達成感」「課題達成からのさらなる発展」に分けられた。「事業参加による課題の達成感」として具体的には、“運動による成果を実感”、“メンバーとのつながりを実感”が挙げられた。運動を始めてから服薬せずに血糖をコントロールできていたり、自分に合った運動ができるとメンバーは語っている。メンバーとのつながりに関しては、欠席をした人がいると保健師あるいはメンバーが自主的に電話にて安否を確認していたことから、抵抗なく次回の参加をするこ

とができたと参加者は語っている。

「課題達成からのさらなる発展」としては、“健康への知的探求への満足”、“地域の一員としての自己の獲得”が挙げられた。参加者は、多様な運動の方法や専門職により定期的に最先端の知識や技術を得られることの喜びを感じていた。また、事業で習得した健康体操を地区の介護予防事業に普及することで評価されている人がいたり、この事業に参加したことを通して自宅での運動習慣を持ち、地区のウォーキング活動にも参加したりと各々活動の幅を広げることにもつながっている。

また、小野寺らは、「女性はサークル活動をきっかけとして対人関係を発展させていくなど対人関係志向性が強いのに対し、男性は課題志向性が強く、目的が漠然とした活動には参加しにくい傾向にある」という先行研究を引用したうえで、今回の研究でも高齢男性は課題志向性が強く、目的が明確な活動に参加する傾向があるという特徴が示されたと指摘している。また同時に、参加当初にもっている課題が達成されることが継続の要因であると考えている。これらから、介護予防事業において高齢男性の参加を継続するためには、事業の目的を明確にすることと、参加者個々の課題を把握し、それらが達成されるようなかかわりが重要であると小野寺らは主張している。

４． まとめ

第一に、活動参加の経緯については、主に身体的状況、心理的状況、社会的状況の３つに分けられ、それぞれの状況から活動参加へとつながっていることが言える。身体的状況としては、“外出時の ADL が自立していること”がより地域活動への参加を促している。心理的状況としては、“退職後の生活を充実させるため”や、“コミュニティを充実させるため”など、地域とのつながりを通して自身の生活に変化を求めることから、活動への参加を決める人が多いことが言える。社会的状況としては、妻や友人など“仲介者の存在の有無”、“退職前の職業”や本人の“交流の得意不得意”が影響してくるということが言える。定年まで働き続けてきたからこそ多くの男性高齢者は地域とのつながりが薄い。そのため、妻などの仲介者がいることが活動の参加へと結びつきやすく、また、様々な人が参加する場に参加しようと決めるには個人の社会性や積極性も関与してくる。

第二に、活動参加による成果については、主に健康面、精神面、社会関係に影響を与えたと考えられる。健康面では地域活動への参加を通して“体調が良くなった”と感じる人が多かった。明るくなったと感じたり、服薬をせずに血糖をコントロールできるようにな

った参加者もいた。精神面では、周囲との関わりを通して“自身の今後の人生について前向きに捉えられるようになった”り、“地域の役に立ちたい”と活動に積極的になり、生活意欲の向上にもつながったと言える。社会関係においては、地域活動に参加することで“友人や外出が増えた”ことや、“地域のつながりの中で生きている”と地域での居場所を感じることができていた。

第三に、活動継続の推進要因については、メンバー間の関係性や活動の在り方に関係することが言える。参加者の関係性においては、“お互いが肩書にこだわらず楽しく自由に活動できる”ことが活動継続の一つの要因として見出されている。滝澤らは、参加者は「今までの会社組織とは違う関係・仲間を求めており、縛られない自由の中で、参加することで得る楽しさがあり、無理することなく続けていくことを望んでいるようであった」と述べている。活動の在り方については、“成果を実感できること”や、“活動拠点があること”、“さまざまな団体との交流や協働があること”など、様々な人や団体との交流を含んだ活動を通して、達成感を感じられることが活動の継続を推進させる要因として挙げられる。

第二章　調査研究

第二章では、京都市における京都市Z区社会福祉協議会と共同運営しているW団体においての参与観察の結果と考察について述べたい。

１．活動の経緯

１．１．　社会背景

Aさんは郵便局で務めていた経験があり、 郵便局で働きながら、地元の少年野球の監督としても活躍していた。 退職後はかぎっ子対策として子どもたちが何か活動出来ないかと地域の人とともに取り組んでおり当初はサッカー、バレーボールなど子どもたちとともに行っていて、今は野球のみを行っている。A さんは「このようにいくつもの活動をしてそれぞれに合った活動を選択できることが良いことだと思う。」と語っていた。 その他にも様々な地域活動（地域防災や地域清掃活動）に参加している。このような活動に参加することを通して地域の情勢を知り、現在の活動に生かしたいと考えている。

Bさんは三菱重工で働いていたため、22歳で関東の方に引越し、62歳までの40年間関

東で暮らしていた。そのため、退職後京都に戻ってきたが、地域とのつながりは一切なかった。 しかし、地域とのつながりを持つことが重要だとBさんは考えていたため、定年後大学の公開講座を受講したりもしていた。 これにとどまらず、Bさんは他にも様々な活動に積極的に参加しており、つながりが広かったり、地域活性化への意欲からW団体の立ち上げにもつながったと思う。BさんはW団体では中心的な役割をしており、本人は「やらされて。」と笑いながら語っていた。 Dさんは他の参加者の方に誘われてZ区社会福祉協議会が主催するコーヒーに関する講座を受講するようになった。他の参加者がDさんを誘ったきっかけは、Dさんの妻が亡くなったからであった。最後に、全体の会話で参加者は、高齢者の孤立や地域の発展のためには、自分たちが動かなければいけないと考えており、地域への問題意識があったことも活動参加につながる背景であったと言えるだろう。

１．２． W団体について

結成の経緯は、元々A 区社会福祉協議会が開催していたコーヒーに関する講座が発端であった。それに参加したメンバーが「ただ学んだだけで終わるのはもったいない、何かせな。」と思ったのがきっかけでW団体がつくられた。 活動の結成には社協の職員からの協力や後押しもあった。

活動の初期はその講座を受けていた6人のメンバーから始まり、現在は5人で活動している。活動の目的は「人を楽しませる、活動する自分たちも楽しむ」ということである。当団体は特養の駐車場で月に一度活動している。活動内容としては、月変わりのコーヒーを淹れて、メンバー同士やコーヒーを飲みに来てくれた方との会話を楽しむことである。コーヒーを飲みに来てくれる人は、特養の職員や利用者、地域の住民など様々である。参加費は活動メンバー含め100円であり、コーヒーは飲み放題になっている。

当団体はコーヒーを淹れるだけでなく、コーヒーに関する小説読んだり、コーヒー染めに取り組んだりと、コーヒーにまつわる活動もしている。コーヒーの残りかすは脱臭剤としても再利用している。 一日の活動の終盤ではミーティングを開き、来月の活動の確認や今後の方針、活動の振り返り（反省や改善も）をする。一方的に話すことがないように、出来るだけ多くの人の考えや思いを共有できるよう社協の職員と参加者が話していた。また、社協の職員がまとめたり話の中心となるのではなく、あくまで参加者同士がお互いに話し合えるようにし、協力が必要とされたときに社協の職員は参加するようにしていた。

２． 活動の効果

活動の効果としては、地域の交流と個々人の生活の向上に関することが見られた。

２．１． 地域交流

第一に地域との交流についてである。まずは、毎月駐車場の使用許可を出している特養の関係者との交流である。具体的には、活動中に特養の職員や利用者が参加したり、その日に飲みきれなかったコーヒーは特養の関係者に提供したりしている。また、提供している珈琲の種類は毎月変わっており、そのたびに地域の様々なコーヒーショップからコーヒーを仕入れている。そして、その日に出たコーヒーの残りかすは農家に提供し、そこから肥料に使われたり、あるいは、企業に提供することで研究にも使われたりしている。さらに、他の地区で男性のみの活動をしている団体との情報交換会も行われている。

２．２． 個々人の生活の向上

第二に、個々人の生活の向上にかかることである。まず、参加者はお互いに、和気あいあいとした時間を過ごし､誰かと話せているということに活動参加への意義を感じていた。妻を亡くされたＤさんは､｢ここに来て､誰かと話せているということは良いことですね｡｣と語っており、メンバーと話し、楽しい時間を共に過ごすことで寂しさを紛らわせられているようであった。次に、参加する多くの人と話すからこそ、様々な情報を得られるということであった。このような生活上の向上をもたらしているのは、当団体が男性のみで活動していることが関係している。Ｂさんは次のように語っている。

「女性がおらず少し寂しい一方で、男性しかいないため気を遣わずに過ごせるのが良いところです。男女だとお互いやはりどうしても気を遣うところがあると思います。男性のみの活動であるため、気楽さがあります｡」

３．活動の課題と解決策

参加者の感じる活動の課題と解決策については以下のとおりである。

３．１． 課題

第一に、参加者が主な課題と考えているのは以下のとおりである。

まず､｢活動の幅を広げていく｣ことについてである。活動拠点の周辺のみならず、よりたくさんの地域の人に知ってもらい、来てもらうことが大切であると参加者は考える。こ

れにより、参加者自身の交友関係や活動場所を広げられていくのではないかと A さんは語る。しかし B さんは、だからといって「何でもかんでも手を出すのは違うと思う。（中略）コーヒーにまつわる様々な活動を考えていきたい。」と話す。B さんは次のように語る。

「全ての人を支えることは不可能です。人それぞれであるから。だからこそ、自分たちが好きなことをやって一部の人であっても興味を持ってくれたら嬉しいです。そこからだんだんとつながりや活動が増えていくのでは？と思います。」

人それぞれ好みや価値観は違うため、全ての人をこの活動を通して支えることは不可能である。だからこそ、自分たちが好きなことをやって一部の人であっても活動に興味を持ってくれたら嬉しいと B さんは考えている。「やりたいことしかやらん。それで良いやん。」と B さんは語りながら、この考え方があるからこそ様々なグループが出来るのであり、誰でも参加できるのではないかと考える。「今では多様性が認められている中で、この活動もその一つになれれば。」と B さんは語った。さらに、「人それぞれ様々な才能や知識を持っているのだから、多くの人と知り合って得たいし、その人の力も発揮させたいです。お互いに成長していきたいです。」と B さんは語っていた。より多くの人に参加してもらい、様々な人と関わることを通して、自分自身はもちろん、他者とともに成長できる意義のある活動にしていきたいと考えている。

次に、「後継者探し」についてである。実際に通りすがりの人も含めて多くの地域の人が来てくれているが、活動に主体的であったり、責任が伴うことはしたくないと思う人が多いのが現状であるそうだ。

さらに、参加者についてである。「やることない、一人暮らしの人も参加してほしい。」と B さんは語っていた。つまり男性高齢者の社会的孤立について指摘されている。

３．２．　解決策

第二に、参加者が考える課題の解決策については以下のとおりである。

まずは、若い人との交流である。B さんは伝統産業と同様に、「上手く若い人たちとも絡み、考えを共有する機会などがあることも重要です。そこから変わっていくことが可能です。」と述べていた。B さんは次のように語っていた。

「昔のことにこだわる必要はないです。若い人の行動力や知識で何か新しいことを作りだしていけると思います。お金だけではなく、世の中に認めてもらえるということが大切であり、若い人がついてきてくれるきっかけになります。そのために高齢者が、若い人が活躍できるようにうまく引っ張っていく必要があります。」

高齢者が若い人たちを導いていくことが大切だと考えているということである。

次に、広報活動についてである。つまり、活動を知ってもらうためにも周りの人への声掛けや広告を出していくことが大切ではないかと B さんは考えている。例えば、私が参加した日は通常は特養の駐車場で行われているが、その日は違う場所で行われていた。そのため、普段とは違い地域の人が訪れてこなかったということがあった。私自身も活動場所に伺った際、大きな目印となるものがなく、見つけるのに時間がかかった。これについては、いつもと違う場所で行う際どのように声掛けし、周知するかが課題であると語られた。

広報については、私が参加した活動後のミーティングでは次の意見が出されていた。例えば、「のぼりを立ててみるのはどうか、そうすることで通りすがりの活動を知らない人たちの目にもとまり、知ってもらえる」「のぼりを活動している際に立てるだけでなく、普段行う特養や社協の方にも立てさせてもらったり、次回開催の日付を書くことでより多くの人に知ってもらうことが大切ではないか 」「市（区）民新聞に活動を載せてもらう」「老人クラブへの声掛け」「地域での展示会など大きな集まりでも広報目的に参加してみるのも良いのではないか？」「簡単なチラシを作って回覧板と一緒に回してもらうことはどうか？」などである。また、新人メンバーを募集するにあたって、「同じく講座のようなものをまずは開催、専門家の方たちにも協力してもらった方が良いのでは？」という意見が出されていた。

さらに、活動の負担を軽減することである。これについて A さんは、「できるだけ一人一人の負担を軽くしながら活動できることが大切なのでは。」と語る。

最後に、活動に参加しやすくすることである。B さんは次のように語っている。

「とりあえずは活動に参加してもらうことが大切です。コーヒーを飲むだけではコーヒーが嫌いな人は来ません。飲むことに絞らず、コーヒーに関するより幅広い活動を行うこと、企画をいっぱい行うことで人を集めたいです。」

コーヒーにかかわる幅広い企画を通してより多くの人の参加を呼び掛けたいということである。あるいは、コーヒーに限定せず、お茶や紅茶を提供することについても言及されていた。しかしこれについては、コーヒーに関することではなくなるため、少し難しいとBさんは語っていた。

３．３．　コロナ禍の活動

なお、コロナ禍の活動としては以下の通りであった。

実際にコロナ禍により活動が制限されることもあった。しかしAさんは、「今までと一緒のことはできなくても、違うことはできます。」と語っていた。例えば、コーヒーに関する小説を読んだり、コーヒー染めを行ってみたりと、コーヒーにまつわる他の活動を考え、継続して行っていた。また、活動時間を普段よりも少し短くするなどしてコロナ禍でも活動できるよう様々な工夫を凝らして活動を続けていた。

４．まとめ

事例研究を通して、1）活動の経緯、2）活動の成果、3）活動の課題と解決策について以下のことが分かった。

第一に活動の経緯としては、メンバーの活動意欲、地域課題に対する問題意識、社協の協力があったことが分かった。元々コーヒーに関する講座を受講していたメンバーは、ただ学んだだけで終わるのではなく、この講座で学んだことを活かして次につなげたいという活動意欲があった。そして、この思いを知った社協の職員の協力や後押しがあったことで、W団体の結成に至ったことが分かった。

第二に活動の成果については、主に精神面、社会関係に影響があったことが分かった。まず精神面としては、メンバーは同性しかいない活動だからこそ感じる気楽さや、和気あいあいといろんな人と話し合えていることに活動の意義を感じていた。また、多くの人と関わるからこそ様々な情報を得られ、生活の向上にもつながっているということが分かった。社会関係では、活動メンバーだけでなく、W 団体の活動拠点となる駐車場を提供する特養の職員や利用者とのつながりも構築されたと言える。さらに、コーヒーを飲みに来る地域の人々とも会話をすることで地域でのつながりをより広げられたり、コーヒーの残りかすを農家や企業に提供することで、団体としても新たな関係を築き上げられたということが言える。

第三に活動の課題と解決策についてである。課題としては、活動の幅を広げることと後継者探しが挙げられるということが分かった。活動の幅を広げることについては、今以上に交友関係や活動場所を広げるためにも、活動拠点のみならず、よりたくさんの地域の人に来てもらうことが大切であると分かった。次に後継者探しについては、活動に主体的であったり、責任が伴うことまではしたくないと考える人が多数であるため、後継者を探していくことが難しいということが分かった。

これらの課題の解決策としては、若い人との交流、広報活動、活動のあり方が指摘されていた。まず、若い人との交流については、高齢者が若い人たちを導いていくことが大切であり、そこから若い人たちの行動力や知識で今後新しいものを作り出していくことで、継続した活動ができるとメンバーは考えていた。

次に、広報活動については、周りの人への声掛けや、チラシを作ったり市民新聞に載せてもらうなどと、ただ活動を行うだけでなく、参加者自身も地域に働きかけ、広報することでより多くの人に活動を知ってもらうことが大切であると分かった。これらの取り組みが新たな活動の担い手の発見や、活動の継続要因につなげられるだろう。

最後に、活動のあり方については、人々が活動に参加しやすくすることが重視されていた。活動に興味を持ってもらい、より多くの人に参加してもらうために、幅広い活動を行うことが提案されていた。そして、活動の負担を軽減することが大切であることが分かった。一人一人の活動の負担を少なくすることで、誰もが気軽に参加し続けられるだろう。

終章　結論

終章では、先行研究と比較しながら本研究の成果と課題について述べたいと思う。

１．活動参加の経緯

先行研究では、活動参加の経緯については、主に身体的状況、心理的状況、社会的状況の３つのことが指摘されていた。

このうち心理的な状況に関連する事柄として本研究では、これまでの自主的な活動を継続したいという思いから、活動参加に至っていることが明らかになった。先行研究では個人の生活の充実や地域のために活動参加に至る人がいることが明らかになっていた。本研

究では地域のために活動参加に至ることは示唆されていたが、個人の生活の向上のためであるかどうかについては明らかにすることができなかった。

社会的な状況に関連する事柄として本研究では、社協の協力があり、グループ結成につながったことが明らかになった。また、妻が亡くなったことにより仲間の励ましから活動参加へ至ったメンバーがいたことが分かった。先行研究では“仲介者の有無”が活動参加の経緯の一つとして挙げられていたように、本研究でも社協という公的な機関や友人というインフォーマルな社会資源である仲介者の存在が重要であることが分かった。

なお、身体的状況に関連する事柄としては、本研究のインタビューでは明らかにできなかったが、観察する中で参加者は身体的には健康で、活動に対して意欲的であった。

２．活動参加による成果

先行研究では、活動参加による成果については、主に健康面、精神面、社会関係への効果が指摘されていた。

このうち精神面に関連する事柄としては、先行研究では、活動に積極的になったり、今後の人生を前向きに捉えられるようになったりと、明るくポジティブな心持ちに変化したことが分かった。また、自身のためだけでなく、活動を通して地域に貢献していきたいという気持ちになっていったことが明らかになった。本研究では、同性同士の活動だからこそお互いに気を遣うことなく、気楽に誰かと話せているということに活動の意義を感じていることが明らかになった。また、色々な人と会話をすることで様々な情報を得られ、それらが生活の向上にもつながっているということが明らかになった。

社会関係に関連する事柄としては、本研究では特養の職員や利用者、地域の人々など、コーヒーを飲みに来る地域の人たちとの関係が広まっていることが明らかになった。先行研究では、友人が増えたことや地域のつながりの中で生きていると感じることができたという成果が示されていた。本研究でも先行研究同様に、地域活動に参加することで地域とのつながりを深め、実感できるということが明らかになった。さらに、農家や企業、他団体との交流を通して、個人にとどまらず地域における団体全体としてのつながりも作りだせるということが明らかになった。

健康面に関する事柄としては、本研究のインタビューでは明らかにできなかったが、参加者全員が歩いて活動場所まで来ていたりと、変わらずに健康を維持できていることがうかがえた。

３．活動継続の推進要因

先行研究では、活動継続の推進要因については、メンバー間の関係性や活動の在り方が指摘されていた。

メンバー間の関係性に関する事柄として、先行研究では、気軽に楽しく活動に参加し、関係を作っていきたいと参加者は考えていることが明らかになった。本研究では、メンバー間の関係性に関する事柄については明らかにすることができなかったが、男性同士の集まりであるからこそ､互いに気を遣わず居心地の良い活動を続けられていると想像できる。

活動の在り方に関する事柄として、本研究では、個人に対する活動の負担が少なくあるべきだということが明らかになった。先行研究では、縛られない自由の中で無理することなく続けられることを望んでいたように、参加者は気軽に参加し楽しめる場であることを活動に求めている。また、本研究では幅広い活動を行うことが新規参加者を増やすことにもつながり、重要であるということが明らかになった。

４．　課題

最後に、先行研究と比較して本研究の課題を述べたい。

まず、活動参加の経緯について、身体的状況を理由とした経緯を明らかにすることができなかった。今後は、外出時の ADL が自立しているかどうかと活動参加の経緯につながりがあるのかどうか調べていく必要がある。また、活動への参加は身体的に自立している高齢者のみとなり、自宅で過ごす要介護の判定を受けた高齢者は参加につながりにくいことが示唆されている。このため、このような要介護の独居男性高齢者にとっても地域とつながる機会を得られるような取り組みが求められる。

次に、活動参加による効果について、健康面に与えた影響を明らかにすることができなかった。今後は、活動参加を通して体調に変化が生じるのかどうか調べていくことが求められる。

最後に、活動の継続要因として挙げられたメンバー間の関係性の重要性について明らかにすることができなかった。今後は、活動を続けていくためには、肩書にこだわらず楽しく自由に活動できるような関係性が求められるのかどうか明らかにしていかなければならない。

（40 字×30 行　16040 字）

注）

[1] 下京男塾(2022)（https://fukushi.kyoto-np.co.jp/column/wa/220614.html, 2022.10.26）.

男の体操同好会（http://sukoyaka.hitomachi-kyoto.genki365.net/gnkk16/pub/group_view.php?gid=G0000437, 2022.10.26）.

男性運動同好会（http://sukoyaka.hitomachi-kyoto.genki365.net/gnkk16/pub/group_view.php?gid=G0000373, 2022.10.26）.

男の料理教室(2016)（https://www.syakyo-kyoto.net/shiritai/wp-content/uploads/sites/10/2016shimogyo.pdf,2022.10.26）.

右京気ままおやじ会(2022)（https://kyotoliving.co.jp/topics/27539.html, 2022.10.26）.

＜引用文献＞

木村オリエ(2006)「郊外地域における男性退職者のコミュニティ活動への参加プロセス　多摩市桜ヶ丘団地の事例」『地理学評論』79(3),111-123

百瀬由美子・麻原きよみ・大久保功子(2001)「小地域単位の住民主体による高齢者健康増進活動の評価ー参加者の主観的効果を評価指標としてー」『日本地域看護学会誌』3(1)、46-51

内閣府(2020)「高齢者社会白書」

小野寺紘平・齋藤美華(2008)「高齢男性の介護予防事業への参加のきっかけと自主的な地域活動への継続参加の要因に関する研究」『東北大学医学部保健学科紀要』17(2),107-116

鈴木良実・麻原きよみ(2021)「定年退職した男性の地域の自主グループ参加による変化：社会参加を促進するために」『日本公衆衛生看護学会誌』10(3),103-111

滝澤 寛子・若林 佳子(2013)「退職男性の地域活動グループの育成とグループ活動の変化からみた活動推進要因」『日本健康教育学誌』21(3), 236-244

矢野香代・近森由江・広瀬美映・山脇優子(2008)「高齢男性の社会参加要因」『川崎医療福祉学会』17 (2), 437-443

謝辞

本調査にご協力くださいました京都市A区社会福祉協議会、W団体の皆さまに深く感謝申し上げます。皆さまのお力添えにより様々なお話を聞くことができ、とても意義深い調査となりました。また、基礎的な方法から論文を書き上げるまで、毎時間丁寧にご指導してくださった鈴木良先生にも心より感謝申し上げます。ご協力くださいました皆さま、本当にありがとうございました。